

我が国の大転換期に当たって思う



のじま たかし
野嶋 孝

中部電力(株) 顧問
/93 代電気学会会長

振り返ってみると、我が国は明治維新以来さまざまな面において、欧米先進国に追いつき・追い越せという大変分かりやすいスローガンのもと、総力を挙げて国づくりを行ってきた。

その結果、昭和30年代初頭から昭和の終わりごろにかけては、それまでの積み重ねによる科学技術力の大幅なアップと勤勉な国民性が相まって、機械・鉄鋼・造船・電機・化学・繊維などを中心とした物づくりによる貿易立国として、欧米と肩を並べて世界経済の中心的な役割を担ってきたことは、まだ記憶に新しいところだ。

しかし平成に入って以降、東南アジアや中国などを中心とした発展途上国の目覚ましい躍進に伴って、その状況は大きく様変わりしてきている。これまで我が国が優位性を維持してきた物づくりの相当な部分を、これら発展途上国に奪われつつある状況だ。

このような状況をもたらした主要因を推測してみると、過去に日本から追い上げられた欧米のケースと、今回の発展途上国から追い上げられた日本の場合とでは、少し中身が異なっているように思う。日本の場合は国内での生産コストや為替レートの上昇により、国際競争力が低下したことが主要因であり、技術力が途上国にキャッチアップされたことではないと思われるからだ。欧米をほぼキャッチアップした日本の優れた技術力はまだまだ世界のトップレベルにあり、もうしばらくの間我が国が世界を牽引することのできる、数少ない優秀な能力の一つであり得ることは、言を待たないところだろう。

しかし一方では、国内での物づくりによる貿易立国として、日本がその優位性を維持し続けることができるかどうかについては、諸事情により大変困難な状況になりつつあると言わざるを得ない。すなわち長期間にわたって形成されてきた高コスト体質や産業構造の転換、それに伴うさまざまな社会システムの変革などは、言うはやすくして一朝一夕にできるものではないからだ。このため、産業界は手っ取り早くコスト削減をはかるべく、生産拠点を海外に移す動きが加速しており、国

内での物づくりの空洞化がすでに始まりつつあるのが実態だ。まさに我が国にとって、根幹を揺るがす大転換期に直面していると言っても過言ではない。

私はこのような大変化に直面すると、決まって思い起こす言葉がある。それはかの有名なダーウィンの進化論の神髄を示すものとして流布されている「強いものが生き残るのではない。賢いものが生き延びるのでもない。生き残ることができるのは変化に対応できたものだけだ。」という主旨の言葉だ。

人間以外の生物の場合は確かにこのとおりということだろうが、物事の先行きを予測し、それへの対応を事前に準備できる能力を有する人間は、偶然だけに身をゆだねているようでは存在価値はない。人間としての特性を十二分に発揮し、生き残るべくして生き残る道を何としても見つけることが、本当の意味での「進化」を勝ち取ることになるということだろう。

兎にも角にも、手をこまねいているわけにはいかない、切迫した状況にあることは確かだ。そして繰り返しになるが、我が国にとって今まさに、物づくりによる貿易立国という従来の柱だけでは、この難局を乗り切ることは極めて困難となってきている。とはいっても、我が国がいままで最も得意としてきた物づくりから、全く離れたところでの新しい柱づくりは大変難しいし、得策でもないと思われる。

したがって、日本がまだ優位性を保っていると思われる技術力の更なるグレードアップに努め、世界の物づくりの頭脳としての役割、すなわち研究開発・エンジニアリング・コンサル力などを担っていくような方向が、望ましい方法の一つではないかとも思っているところだが、いずれにしろ、新しい柱を立てそれを実行に移すまでには、教育や税制、振興策などのさまざまな社会システム改革も必要となるだろう。そのためには、人手も時間もかかることは必至なので、早急に各界諸賢の叡知を結集して新しい柱づくりを具体化し、この大転換期を乗り切って、見事な「進化」を成し遂げたいものだ。